

第53回

『Face to Faceの会』たより

▶ 特別講演

これからの医学部の発展に向けて

大阪公立大学医学部・大学院医学研究科
研究科長兼任学部長 鶴田 大輔



● 大阪公立大学の発展に向けたビジョンと課題

これからの医学部の発展に向けた目標と課題について講演を行った。

まず、働き方改革では、会議や書類業務の見直しを通じて、教職員が研究や教育に割ける時間を創出する方針を示した。ダイバーシティ推進では、女性教員の登用や、クロスマッチング制度の整備について述べた。教育分野では、国際バカロレア入試の導入や、USMLE合格者の増加を目指した取り組みを始めることを述べた。

研究活動では、全学的に、幅広い学術研究の推進が求められており、国際競争力を高めるためのプラットフォーム整備や財政基盤の多様化が目指されているため、中でもクラウドファンディングを活用した資金調達の強化や、若手研究者の支援について述べた。

大阪公立大学の「Vision 2030」に関する社会共創、教育、研究、医療、国際協働、ガバナンスの6つのビジョンについても提示した。社会共創では、地域連携と産学官民共創の推進、特に「インバーショニアカデミー事業」について述べた。

教育面では、専門性と学際性の両立に関して、研究面では、先端研究基盤の共用促進と研究成果の社会実装に関して、医療分野では、患者本位の医療提供や医療技術の革新、地域コミュニティとの連携について述べた。

国際協働の分野では、グローバルな教育プログラムの充実、留学生の支援体制の強化、国際共同研究の促進について述べた。最後に、大学運営のガバナンスに関しては、財務基盤の多様化、IR(インスティテューショナル・リサーチ)を活用した資源配分の最適化、卒業生ネットワークの活用について述べた。

これらの取り組みは、大学の国際的な競争力を高め、地域社会や産業界への貢献を深めるための重要な戦略と考えられるため、医学部は特別ではなく、大学の一員としての貢献も特に意識して行動する必要があると強調した。

大阪公立大学の発展に向けたビジョンと課題

医学研究科長・医学部長 鶴田 大輔

働き方改革：会議や書類業務の見直しを通じて、教職員が研究や教育に割ける時間を創出する。
ダイバーシティ推進：女性教員の登用や、クロスマッチング制度の整備を進める。
教育改革：国際バカロレア入試の導入や、USMLE合格者の増加を目指した取り組みを始める。
研究活動：幅広い学術研究の推進、国際競争力を高めるためのプラットフォーム整備、財政基盤の多様化について検討する。

大阪公立大学「Vision 2030」

社会共創
教育
研究
医療
国際協働
ガバナンス

という6つのビジョン
(<https://www.omy.ac.jp/vision/>参照)

老化と脊椎、今われわれが出来ること

大阪公立大学医学部附属病院
整形外科 診療科部長 寺井 秀富



腰痛は加齢とともに増加していき、75歳以上の高齢者では2割が愁訴を有している。(図1)

高齢者における腰痛症の原因として腰部脊柱管狭窄症、脊柱変形、骨粗鬆症性椎体骨折などがある。大阪公立大学整形外科では最新の内視鏡手術を施行しており、7mm程度の2つの穴から内視鏡を用いて除圧手術を行っている。(図2)

加齢に伴い腰椎が後弯する、いわゆる『腰曲がり』が腰痛の原因として重要であり、生活の質(ADL)と関係する。(図3)腰曲がりの原因は色々とあるが、股関節の拘縮や脊柱起立筋の筋力低下が大きく関わっており、70代で急速に進行することがわかっている。腰曲がりに対する運動療法として股関節の関節可動域訓練や脊柱起立筋の強化などが有効であると考えられるが、すでに完成してしまった腰曲がりでは姿勢改善は期待できないことがわかっている。そのような場合には手術療法を行うこともある。(図4)

以上の結果から、われわれが今できることとして、腰曲がりが完成する前にストレッチや筋力増強のために運動を行うことが大切であると考える。それが奏功しない場合には最新の手術があるので検討してみてはいかがでしょうか。

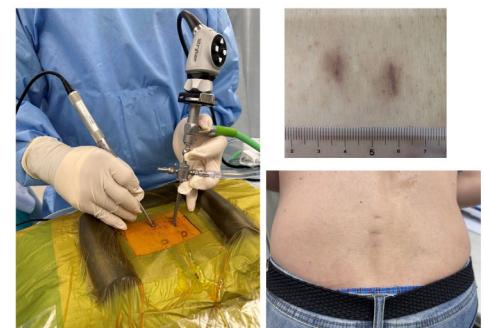
(図1) 有訴者率 (人口千対)

(総数) (75歳以上)

・腰痛	102.6	201.8
・肩こり	86.5	107.8
・手足の関節が痛む	56.1	130.5
・鼻づまり・鼻汁	50.2	55.6
・せき・痰	49.3	81.8
・体がだるい	46.1	59.1
・頭痛	36.8	26.4
・手足のしびれ	35.5	34.8
・ものを見づらい	35.2	86.9
・便秘	34.8	95.9
・頻尿	33.0	108.4
・腹痛・胃痛	17.8	17.8

(国民衛生の動向 2023/2024)

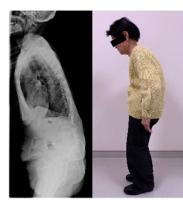
(図2)



(図3)

腰曲がりによって生じる諸問題

- ・外見上の異常
- ・心理的負担・ストレス
- ・腰痛・下肢痛
- ・易疲労性・易転倒性
- ・歩行速度の低下
- ・呼吸器症状
- ・消化器症状



(図4)

腰曲がりに対する脊椎矯正固定手術

71F Pre-Op. 76F POD 5y



▶一般演題Ⅱ

赤ちゃんと子どもの四肢の異常 －診察時に役立つ実践的なコツ－

大阪公立大学医学部附属病院

整形外科 新谷 康介



整形外科小児班は体制を整備し、発育性股関節形成不全や先天性内反足などの代表的疾患をはじめ、先天異常(多合指(趾)症、四肢形成不全など)、四肢変形、四肢長不等(感染症や外傷後、骨系統疾患など)に加え、緊急性の高い症例を含めたすべての小児運動器官の機能的・整容的な異常に 対する治療にあたっています。本講演では、小児整形外科診療の概要と専門医以外の先生方にも役立つ実践的な診察方法についてご紹介しました。

小児患者は成長過程にあるため、成長を考慮した治療戦略が必要です。また、乳幼児を診療する場合、怖がらせない工夫や保護者との連携は重要です。診察の進め方として、「見た目でわかる異常」と「見た目ではわかりにくい異常」に分け、それぞれの対応方法を解説しました。

たとえば、新生児や乳幼児における「見た目でわかる異常」には、先天性内反足や先天性膝関節脱臼といった早期治療が望ましい疾患から、母指多指症や合指(趾)症などの1歳前後の治療を計画する疾患が含まれます。一方、「見た目ではわかりにくい異常」には、定期健診・検診で指摘される疾患が多いですが、近年では早期介入が推奨されるケースが増えています。

さらに、骨折や感染症などの緊急性の高い外傷や疾患についても具体例を挙げて説明しました。特に、膝周囲の痛みが股関節疾患に関連する可能性や、被虐待児症候群の兆候を見逃さないことの重要性について強調しました。

地域医療機関や他診療科との連携は非常に重要です。疑問や困難に直面した場合には、当院整形外科小児班へご相談をお願いいたします。本講演が日々の診療現場で子どもの健康管理に役立つことを願っております。



「膝痛」には注意

- 疼痛は股関節部（鼠径部付近）に訴えるとは限らず、大腿部～膝付近（主に前面）の痛みを訴える場合がある
- 股関節疾患（軽度の安定型のすべりなど）を見逃さないことが非常に重要



「小児において**大腿部痛**、**膝部痛**を訴える場合、**下肢全体の身体所見**をとることを心がける」

Matava MJ, Journal of Pediatric Orthopaedics, 1999.

被虐待児症候群

(1) 身体的虐待 (2) ネグレクト (3) 性的虐待 (4) 心理的虐待

- ✓ こどもが自然に骨折することはなく、保護者が外傷起点を説明できない、あいまい、不自然な骨折のほとんどは虐待が原因
- ✓ 露出していない部分に多い
- ✓ 複数の存在・反復した出現
- ✓ 不潔な皮膚状態、身長体重の増加不良
- ✓ 休日や夜間などの通常診察時間外に連れてくることが多い
- ✓ 児童相談所が受けた虐待相談のうち、医療機関からの相談は**全体のわずか6%**

・日本小児科学会、子ども虐待診療の手引き
・2002 新見、被虐待児症候群が疑われる時の小児科医の対応について